

# 進捗状況報告シート

(2011年度・大学)

担当部局は  ☆印の箇所を記入してください。

## I. 評価項目・要素と担当部局

対象部局	統括部局：キャリアセンター	担当部局：キャリアセンター
大項目	8 学生支援（研究科）《全学的な視点》	
中項目		
小項目	8.0.4 学生の進路支援は適切に行われているか。	
要素	進路選択に関わる指導・ガイダンスの実施	
	キャリア支援に関する組織体制の整備	
	キャリア教育の適切性	

## II. 自己点検・評価(2010.5.1～2011.4.30の進捗状況報告)

### 《目標・指標》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況の評価を行っている。

進捗評価はA～Dの4段階とし自ら評価した。A～D評価は目安として次のようなものである。

A：目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。

B：目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。

C：目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。

D：目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 文系研究科（博士課程前期課程、修士課程）修了者の就職率を77%以上とする	→就職率・・・分母は「就職希望者」ではなく、「修了者」である。具体的には（就職決定者+自営）÷（修了者-進学決定者）	C	C			
2. 大学院学生のみを対象とするインターンシップに毎年1名以上派遣する	→受け入れ側が選抜を行う大学院学生対象インターンシップへの派遣	C	C			
3. 大学院学生のみを対象としたプログラムの増加（2009年度は3件） （2013年度以降に設定が予定されている文理融合型の研究科横断的枠組みの準備として）	→大学院学生のみ対象のプログラム・・・2009年度は3件；「文系大学院生対象就職セミナー」「社会演習（インターンシップ）」「理系院生の就職活動の始め方と心構え」	B	B			

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
なし	→なし					
なし	→なし					

### 《現状の説明》 ※ 全小項目について記述が必要

小項目8.0.4	8.0.4 学生の進路支援は適切に行われているか。 (説明) 大学院生の修了後の進路は高等教育機関での研究職もしくは民間企業や公務ということになる。本学各研究科の設置形態から、文系、理系、専門職大学院に分けることになるが、文系大学院生の就職支援が大きな課題になっている。明確な形で学部生との差別化を図ることが困難であるからだ。理系大学院生についても研究科規模の拡大のため従前のように研究科の教員の努力だけでは対処できなくなってきた。専門職大学院の中では司法研究科において、新司法試験不合格者のための就職支援を考えなくてはならない状況になってきた。
☆ その他	

### 《評価指標データ》

女子学生の職掌別就職状況（総合職、準総合職、専門職、一般職）

キャリアセンター主催プログラム（ガイダンスなど）への参加率

男子学生と女子学生の比較で、就職決定先に満足している卒業予定者の比率

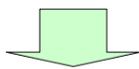
☆ 追加データがあれば追加してください。

## ◎効果が上がっている事項

## 《点検・評価(1)》効果が上がっている事項

注)出来るだけ内容を裏付ける客観的根拠を記述してください。

★	小項目8.0.4	理系大学院生の就職支援のためのガイダンスや理系に特化した企業セミナーを開催する。また理工学部就職委員との連携を密にしている。
	その他	



## 【次年度に向けた方策(1)】伸長させるための方策

注)出来るだけ手順や方法を明確にするなど行動計画を具体的に記述してください。

★	小項目8.0.4	理系大学院生の就職支援のための枠組みは検討を重ねた結果、ようやく形ができつつある状況なので、基本的には現在の姿を継続することとしている。
	その他	

## ◎改善すべき事項

## 《点検・評価(2)》改善すべき事項

注)出来るだけ内容を裏付ける客観的根拠を記述してください。

★	小項目8.0.4	就職指導の多くの部分を指導教授に委ねる状況が存在する。その中で、企業への就職を希望する文系大学院生への就職支援は早急に対応策を検討しなければならない。
	その他	



## 《次年度に向けた方策(2)》改善方策

注)出来るだけ手順や方法を明確にするなど行動計画を具体的に記述してください。

★	小項目8.0.4	全研究科において進路決定状況調査を実施し、状況を把握した上で、キャリアセンターでの個人面談に誘導する。また企業訪問時に、特に文系大学院修了者の雇用に関し照会を行う。なお、今後の当センターでの課題になるが、学部学生の就職支援の片手間に大学院生のサポートを行うのではなく、大学院生の就職支援に必要な人員を配置し、大学院生対象のガイダンスやセミナーを企画することも考えていく必要があると考える。
	その他	

## ◎自由記述

## 《点検・評価》&amp;《次年度に向けた方策》

★	その他 (自由記述)	日本全体の雇用環境は依然厳しいものがある。本学は学部学生については高い就職決定率を維持できたが、文系大学院生の就職率では昨年度より低下した。雇用する側から言うならば、大学院生、とりわけ文系大学院生をあえて採用すべき根拠がないのである。そのような状況であるので、学部学生以上に本人が意欲を持って就職準備をする必要があり、大学側も各研究科とキャリアセンターが協力した態勢での支援が必要である。
---	---------------	--

## Ⅲ. 学内第三者評価

## &lt;評価専門委員会からの評価&gt;

## 【学外委員】

○文系大学院生の就職率が昨年度より低下（目標の77%に対する詳細のデータは不明）とあります。最近では日本においてもMBAをはじめとする専門性をもった大学院生を評価する傾向が企業で強まる一方で、大学院全体の定員増加に伴う学生の質の維持・向上が課題となっています。指摘されている通り、大学院生の就職対策を本格的に検討する時期にきているものと思われます。

## 【学内委員】

○院生に対するキャリアセンターの積極的な支援の動きは心強い。  
○現状の説明や目標達成に向けた取り組みも具体的でわかりやすくまとめられています。  
○現在の大学院にはさまざまな目的を持つ学生が混在しています。かつてのように大学や研究機関で職を得ようとする学生ばかりではありません。彼らの大半は企業への就職を希望しています。それゆえ、従前とは異なる就職支援が必要になってきました。有効な仕組みが形成されることを期待します。  
○文系大学院の修了者の就職率についての考察が必要と思われます。その上で改善すべき事項として記載されたのならばその関連を示す必要があると思われます。  
○目標1に掲げられた就職率については、数字をあげて説明、検証願いたい。また、その他の目標についても現状説明で触れていただきたい。  
○大学院生に対する進路支援は本学だけの問題ではありませんが、本学にとっても大きな問題です。出口だけで考えるのではなく、全学で入り口から出口まで、総合的に検討し、早急に対応する必要があるでしょう。

○昨年度の次のコメントは本年度もそのままコメントとします。  
・大学院生の進路問題は本学だけの問題ではありませんが、大変悩ましい問題です。入口と出口の政策が連動していないことも課題のひとつでしょう。関西学院の大学院施策の中でも議論されるべき事柄です。  
・大学院生の就職率を上げることに努力しておられることは高く評価できます。さらに大きな成果が得られることが期待されます。ただ、技術的なことですが、就職率の分母が（修了者一進学予定者）となっていますが、もう少し厳密に考える必要はないか気になると思います。また、一口に大学院生といっても、今日ではきわめて多様な学生が混在しているので、就職の指導には難しい問題があります。

## 【大学基準協会：評価に際し留意すべき事項】

○小項目8.0.4  
基盤評価：「学生の進路選択に関わるガイダンスを実施するほか、キャリアセンター等の設置、キャリア形成支援教育の実施等、組織的・体系的な指導・助言に必要な体制を整備していること」  
達成度評価：「進路支援、学生のキャリア形成支援のための仕組み、組織体制、その運用状況等が、学生支援に関する方針に沿うものであり、学生に対する支援として適切であるといえる」

#### IV. 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

キャリアセンターでは年間約400社の企業を訪問している。その際、大学院学生、特に文系研究科学生に対するニーズをヒアリングしている。大半の企業の考え方は、特別に大学院修了者枠を設けることはせず、学部学生と一緒に選考の土俵に上がってもらい、論理的思考力や研究課題に取り組む姿勢に相応の違いが見られる場合、評価することがあるとしている。就職活動においては、大学院学生のための特別な指導・対応が存在するわけではないが、彼らだけを対象としたセミナーは実施している。

文系研究科（博士課程前期課程、修士課程）修了者の就職率は、2008年度73.7%、2009年度68.0%、2010年度63.2%と下降傾向にある。既述のように、多くの企業は特に大学院学生枠を設けることはないので、大学院学生も学部学生同様の事前準備が必要である。なお、大学院においては、学生と指導教員との関係が緊密であるので、指導教員の就職活動に対する理解も欠かせない。

大学院学生のみを対象とするインターンシップへの派遣についてであるが、2010年度は希望者がなかったが、2011年度は1名を大手銀行のシンクタンクに派遣した。

大学院学生のみを対象としたプログラムについてであるが、2009年度は「文系大学院生対象セミナー」「社会演習（インターンシップ）」「理系院生の就職活動の始め方と心構え（セミナー）」を実施した。しかし2010年度以降「文系大学院生対象セミナー」は開催していない。これは、就職活動に関しては、伝える内容が学部学生と変わる点がないこと、2009年度開講したところ参加者が数名であったことから、大学院学生も学部学生向けのキャリアガイダンスに参加してもらうのが現実的だと判断したからである。